長崎県・北松浦半島

漁村・農村での民泊体験

松浦党の里の感動体験から学ぶ探究学習

地域の人とふれあいながら挑戦する船釣り体験

私たちの活動の舞台は、長崎県北部の北松浦半島とその周辺の島々です。源平合戦や元寇で活躍した「松浦党水軍」の本拠地であり、海や農漁村の暮らし、地域に受け継がれてきた文化が今も息づいています。この地域のなりわいと、そこに暮らす人々との交流を体験できるのが「松浦党の里ほんなもん体験」です。

◆民泊先の家業に左右されない体験選択

松浦では、教育民泊と体験プログラムを分けて運営しています。そのため、生徒は宿泊する家庭の家業に左右されず、学校の学習テーマや自分の関心に応じた体験を選択できます。

船釣り、定置網漁、刺網漁、港釣り、養殖場での餌やりなどの漁業体験に加え、地域の食材を使った料理や味覚体験、農業体験など、約40種類のプログラムを用意しています。海の体験に限らず、生徒それぞれの関心や学校の狙いに合わせて組み合わせられることが、松浦の教育旅行の特徴です。

同じ学校の生徒が異なる体験に参加し、それぞれの気付きや発見を持ち帰ることで、一つの地域をさまざまな視点から考える学習にもつなげることができます。

養殖の仕事を間近で体感する餌やり体験

◆体験ごとに異なる地域の人と出会う

体験を支えるのは、漁師や養殖業者、料理体験の担い手をはじめ、地域の仕事や暮らしをよく知る人々です。生徒は実際に手を動かしながら、体験に関わる知恵や工夫、地域での経験や思いを直接聞くことができます。

同じ種類の体験であっても、出会う人や交わされる会話によって、生徒が感じることは異なります。事前に疑問や質問を考え、現地で地域の人に尋ね、体験後に振り返ることで、一人一人の気付きを学びへと深めていきます。

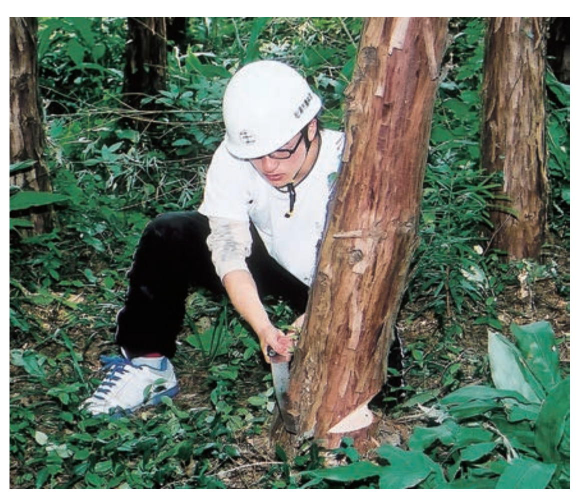
松浦の「ほんなもん体験」では、体験そのものに加え、そこで地域の人と向き合い、その人の言葉や人柄に触れる時間を大切にしています。

◆教育民泊は、もう一つの出会いの場

教育民泊では、生徒をお客さまとしてではなく、家族の一員として迎えます。食事づくりや片付けなど、その家庭の日常をともにしながら、普段接する機会の少ない世代の人々と過ごします。

体験先では、その体験や地域について知る人と出会い、教育民泊では、受け入れ家庭の暮らしや考え方に触れます。それぞれの場で異なる人と出会い、異なる経験ができることも、松浦の教育旅行の魅力です。

多様な体験から自分の関心に合うものを選び、地域の人から直接話を聞き、受け入れ家庭では日常の暮らしに加わる。松浦では、それぞれの場で生まれる人との出会いを通して、生徒一人ひとりの心に残る体験交流をお届けします。


地域の人と協力して取り組む森林間伐体験

受け入れ家庭と食卓を囲み、心を通わせる教育民泊

一般社団法人　まつうら党交流公社
〒859-4778 長崎県松浦市御厨町田代免601
TEL 0956-41-7171　FAX 0956-75-3001
Email:kouryu-1ban@matsuurato.jp
URL:https://www.honmono-taiken.jp/

オピニオン

人間力を養う体験を

最大震度7という熊本地震は、多くの死者や、家屋の倒壊、商業施設の爆発、鉄道、道路、水道、電気などのインフラ遮断といった甚大な被害をもたらした。しかし、九州の他県への影響は少なく、秋の修学旅行は風評に惑わされることなく実施してほしいものである。

戦後81年目の夏を迎えた。ヒロシマ、ナガサキと平和記念式典が開催され、世界百数十カ国からの参加があった。ロシア・ウクライナ戦争は4年半が経過し、終わりそうで終わらないイスラエルのガザ地区侵攻や、イランと米国の核開発やホルムズ海峡をめぐる覇権争いも先行き不透明である。唯一の被爆国である日本の外交的な役割は大きい。併せて平和学習の必要性も高い。

日本の人口が1億2千万人を割り込んで、1億1907万8千人となった。地方の人口減少が著しく、人口や経済格差は広がるばかりである。食料自給率（カロリーベース）は37%と過去最低となった。ちなみに東京は0%、大阪は1%、神奈川は2%であり、大都市圏の食料は、日本の地方の食料生産現場である農山漁村と輸入食材に頼ることになる。

日本では、人口減少と地方の衰退、自然災害への備え、1次産業と食糧の問題、クマなどの獣害対策、自然との共生など課題が山積している。地球温暖化やエネルギーなど、地球規模の社会的課題もある。それらは、いずれも未来を担う青少年の課題でもある。他人事ではなく、自分事として捉えて、社会課題を探究学習のテーマとして取り組んでほしい。地方は探究学習の宝庫である。

文科省はスマートフォンの使用時間と全国一斉学力テストの正答率との関係を調査し、その結果を発表した。中学生で1日3時間以上の正答率は49・1%となり、30分以内の生徒に比べて約21ポイントも低い結果となった。さらには、ゲームやユーチューブ視聴などを合わせると学習時間の確保がままならない状況である。

せっかくの夏休みに「熱中症注意・外出を控えて」のテロップがテレビから連日のように流れていた。自然の中で遊ばず、室内で電子機器とのにらめっこばかりでは、コミュニケーション機会も少なく、人間関係構築能力が育まれない。

2030年に向けた新学習指導要領では、かねてからの「主体的・対話的で深い学び」や「探求学習」は踏襲され、自らが考え課題解決に向かう姿が求められることになる。スマホ、SNS、ゲームなどのバーチャルな世界に生きる生徒にとっては「解」が求められるか心配である。体験値が少なく、知見が乏しい生徒たちに真実に直面する体験の場が与えられるかが重要である。教育は機会を与えることから始まる。

本紙の中学校教育旅行特集では、安全安心で教育効果が高い、全国ほんもの体験ネットワークならびに全国教育民泊協会の会員が今特集に掲載されている。いずれも自然体験、農林水産業体験、教育民泊、ものづくり、歴史文化体験、食文化体験などを通じて、探究学習手法で人間力を養う体験学習の適地である。

ぜひ貴校の学校行事への活用をお願いします。

全国ほんもの体験ネットワーク会長
全国教育民泊協会会長
株式会社体験教育企画代表取締役　藤澤安良

人間力を育む体験交流

徳島県・美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町

〝日本一の田舎〟そらの郷

ESD・若者のためのSDGs実践現場

世界が認めるウォータースポーツフィールド

徳島県の西部「そらの郷」は、四国の中央に位置するにし阿波(美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町)エリアです。「大歩危・祖谷」「吉野川」「剣山」に代表される自然、歴史文化、伝統や伝承、さらに独自の食文化、伝統芸能に彩られた全国屈指の観光地域であるとともに、素朴で温かみのある古き良き暮らしが今もなお息づいています。

そらの郷の民泊家庭は115軒（受け入れ可能人数400人）で、その多くが山腹の急傾斜地に張り付くように形成される集落に存在し、特有の文化的背景を形成しています。山畑のコエグロ、石積み、人家などが一つとなった傾斜地における自然共生の風景こそが「日本一の田舎」や「桃源郷」とも称される日本の原風景です。

生徒たちは家族の一員として迎えられ、茶摘みや野菜の収穫、雑穀の収穫など、少量多品種の自給的農業を協働します。収穫した旬の野菜や山菜を使って田舎料理を共同調理、家族団らんの食事での心の交流。高度な土地利用が成すエシカル農業ライフや生物多様性を保全し、貧困問題の解決に寄与するサスティナブル農法など、各種SDGsコンテンツの実践体験によって〝日本一〟の厳しさを豊かに変える暮らしを学びます。

SDGs－PBL×STEAMプログラムでは、地元高校生とフィールドワークなどに取り組む

にし阿波エリアは「地方創生の成功事例」といわれ、2016年に農林水産省から「食と農の景勝地」の認定。18年に国連食糧農業機関(FAO)から「世界農業遺産(GIAHS)」の認定。20年に第17回オーライ！ニッポン大賞「内閣総理大臣賞」を受賞しています。また、SDGsの実践現場としてESDの地域推進拠点に登録されており、「PBL(課題解決型学習)×STEAMプログラム」を実施しています。各校のテーマに沿い、フィールドワーク、ワークショップ、ディスカッションなどを組み立てるほんもののSDGsアクティブラーニングを通して、多様性の時代に対応する社会に開かれた教育現場「日本一の田舎」として、未来を変える若者を育成します。

傾斜地に点在する集落「天空の里」で田舎暮らしを体験

「食と農の景勝地」でSDGsを実践

なお、withコロナ対策として、民泊HACCP衛生管理を導入するなど、品質のアップデートに成功しました。全ての民泊家庭やインストラクターは、研修の安全衛生講習を受け、危機管理や安全対策に関する万全の体制を整えています。

農業体験交流

■吉野川ラフティング＝日本三大暴れ川、吉野川は世界クラスのラフティングコース。17年、日本初の世界選手権を開催。仲間とボートを操り、激流を乗り越え、五感で自然と対峙します。

■静水ラフティング＝静水の中でラフティングができることが最大の特徴。個性を認め、支え合い、一つのゴールに向かって進んでゆけるチームづくりに最適です。

■吉野川パークゴルフ＝多世代交流型のスポーツを介し、河川環境マインドや心身の健全な成長を促し、社会的コミュニケーション能力を身につけます。

一般社団法人 そらの郷
営業時間　平日8：30～17：15
※内容のお問い合わせは事務局・担当者までお願いします。
〒778-0005 徳島県三好市池田町シマ995-1
TEL 0883-76-0713　FAX 0883-72-0753
E-mail sora-yamazato@nishi-awa.jp
URL https://nishi-awa.jp/soranosato/

高知県・四万十・足摺エリア

日本最後の清流を体験

「主体的・対話で深い学び」でSDGs考える

四万十川でのカヌー体験

四国西南部に位置する高知県の四万十・足摺(幡多)地域は、日本最後の清流といわれている「四万十川」を中心に「足摺岬」など山、川、海と多様な自然環境に恵まれた地域です。この豊かな自然環境を生かしたさまざまな体験プログラムを商品化しており、全国に誇れる自然体験型観光の先進地を目指しております。

■SDGs学習プログラム

自然豊かな幡多地域で、「主体的・対話的で深い学び」を通して、持続可能な社会を未来につなぐために、自分たちは主体的に何ができるかを考えます。

■体験プログラム

体験プログラムは、「何にもないのに、なんでもある」をキーワードに豊かな自然が残っている田舎だからこそできる体験を中心に、食、文化、漁業、農林業など100種類を超える体験プログラムを提供しております。

防災学習で砂浜へ

自然と人との共生の形を学ぶSDGs

人気が高い「カツオのわら焼きタタキづくり体験」

■田舎暮らし体験

特に大都市圏の学校から高い評価を得ているのは、一般の農山漁村家庭の〝ありのままの暮らし〟を体験できる「田舎暮らし体験」です。現在、受け入れ家庭数は60軒を超え、1日最大150人程度の受け入れが可能となっています。山、川、海に恵まれたこの地域では、自然を知り、触れ合うことで自然とともに生きる力を養うことができます。

■カツオのわら焼きタタキづくり体験

高知の食文化の代表でもあり、一番人気です。漁師のおじさん、おばさんがインストラクターとなり、生徒自らがカツオ1本を丸ごとさばいてわらで焼き、タタキを作って食べます。この体験によりカツオ漁の歴史や高知の食文化などを感じ、食材への感謝の気持ちを育むとともに、魚嫌いの生徒も自然と食べることができるようになります。

■四万十川カヌー体験

初心者でも安全かつ気軽に体験できます。カヌーから見る自然景観は、日本の原風景とも言えます。最後の清流、四万十川を見ることのできる貴重な体験となります。

■防災学習

地震などの自然災害から身を守り、生きる力を育てるプログラムを用意しています。過去に起こった事例を学ぶのではなく、これから起こり得る近い将来の災害について自分たちがどのような行動ができるかを考え、一人一人の防災意識を高めるためのプログラムとなっております。

■受け入れ態勢

受け入れ窓口の幡多広域観光協議会は、高知県と幡多6市町村（四万十市、宿毛市、土佐清水市、黒潮町、大月町、三原村）で組織し、四万十・足摺地域でしか体験できない豊かな自然、食、伝統文化、生活や人と人との心のつながりを生徒に感じていただける安全で信頼性の高い体験プログラムを提供できるよう、官民が一体となって取り組んでおります。

一般社団法人　幡多広域観光協議会
〒787-0014 高知県四万十市駅前町10ー20
TEL 0880-31-0233　FAX 0880-31-0660
E-mail syuryo@hata-koiki.com
URL https://www.hata-kochi.jp/